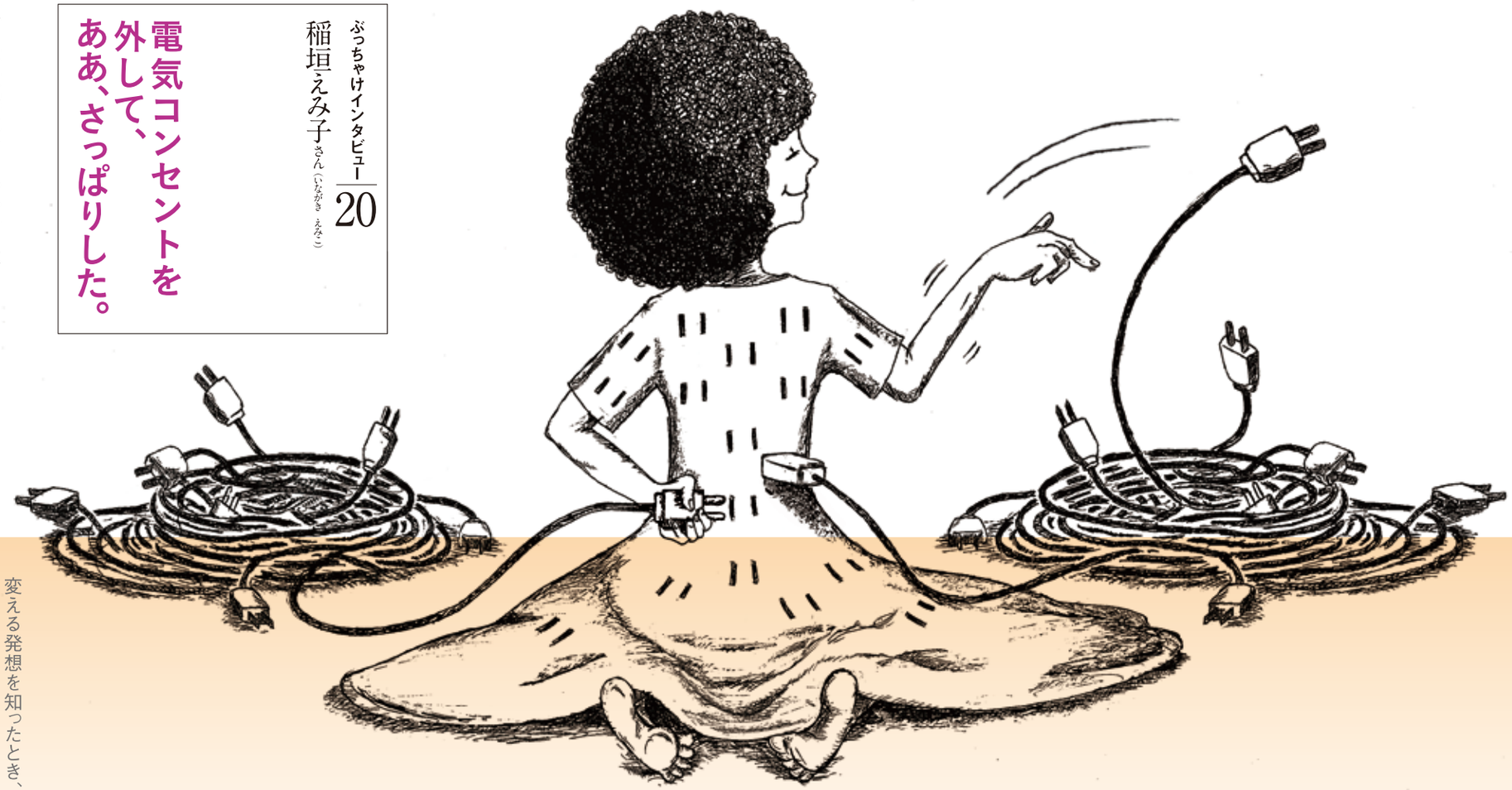
ぶっちゃけインタビュー 20

稲垣えみ子さん（いながき えみこ）

電気コンセントを外して、ああ、さっぱりした。

東日本大震災をきっかけに、
「ひとり脱原発」に乗り出した稲垣さん。
洗濯機もクーラーも冷蔵庫も捨てて
「電気代月二〇〇円以下」の暮らし。
ガスも止めて、朝日新聞記者の職も辞す。
便利さもお金も肩書も失って、
「生きていくために必要なものは
ほんのちょっとしかない」ことに気づいた。
いままで必死に追いかけていた欲から
自由になれば、
どんな世界が見えてくるのだろう。



里見喜久夫（『コトノネ』編集部）＝インタビュー
interview by Kikuo Satomi
岸本 剛＝写真
photograph by Tsuyoshi Kishimoto

楽しい「ひとり脱原発」

―電気に頼らない暮らしをいまも続けておられる。「脱原発」を叫ぶ人はいるけれど、自分からはじめられるところがすごい。

いやいやそんな大したことじゃありません。みんなを変えるような気力も体力も知力もなかっただけで。自分のできることをするしか。

―わたしも、『コトノネ』を発行しましたのは、東日本大震災がきっかけです。原発事故で世の中が変わる。そのとき、自分も世の中の「当事者」になりたい、と思ったんです。いままで、家庭でも、子育てでも、社会でも、当事者ではなかったな、と振り返って。

「当事者になってない」という総括がすごい！ なかなかそんなふうには思えません。

―ありがとうございます。けれど、それまで、障害者になんの関心もなかったオッサンが、『コトノネ』で、みんなの意識を変えるなんて、本当におこがましい話で。稲垣さんの自分を変える発想を知ったとき、衝撃でした。それに、『寂しい生活』（※1）を読むと、楽しんでおられるではないですか。

いやいや、やってみれば案外誰だってできるんじゃないかと。わたしには年子の姉がいまして、いまのわたしとは正反対でものを捨てるのが苦手。だからわたしの本を読むと息苦しくなるって言うんです。その姉が今年（二〇一七年）の夏、なんとエアコンを使わないことにしたと。八月に入っても一回も動かしていない。でもやってみたら悪くないっていうんですね。むしろ快適なこともあると。たとえばエアコンをつけていると、部屋を密閉しているので帰ってきたときに家の中のムアーとした熱気がすごい。でもやめてみたらそういう不快さがなくなったと。夏っていっても、暑くて耐え難い日ばかりじゃない。気温がちょうとましになったり、微妙に変わる。ああ、今日は風があって少し涼しいみたい、と敏感になる。そんなちょうとした気づきがおもしろいって言うんですよ。

―なるほど、のっぺらぼうの暑さでなくなる。

それに、出かけることが苦ではなくなった、と。家の中が涼しいと、一歩も出たくない。クーラーを止めれば、家も外もいっしょ。家族もいっしかブーブー言わなくなったらしくて。七月も終わったんで、ここまできたらつけたら負けみたいな感じがあって、もうつけられないって言っていました。

上を目指す生き方は、もういいか

―でも、都内は暑いでしょ。

家のつくりにもよるんじゃないでしょうか。わたしのいまの家はけっこう風が通るんです。東京オリンピックの直後に建った古いマンションなんで、当時はエア